

カテゴリー

脳科学

タイトル

神経学的状態からみるバランスコントロールの援助としての接触介助 Deliberately Light

Interpersonal Touch as an Aid to Balance Control in Neurologic Conditions PubMedへ

Johannsen L et al : Rehabil Nurs. 2014 Dec 27. doi: 10.1002/rnj.197

内容

目的

●著者らは、神経障害患者（パーキンソン 12 名・陳旧性片麻痺患者 11 名）に対する軽い interpersonal touch (IPT) が、body sway（身体動揺）を減らすかどうかを調査

方法

●health-care professional（医療専門家）により、体幹背部から IPT が提供されながら、pressure plate で計測

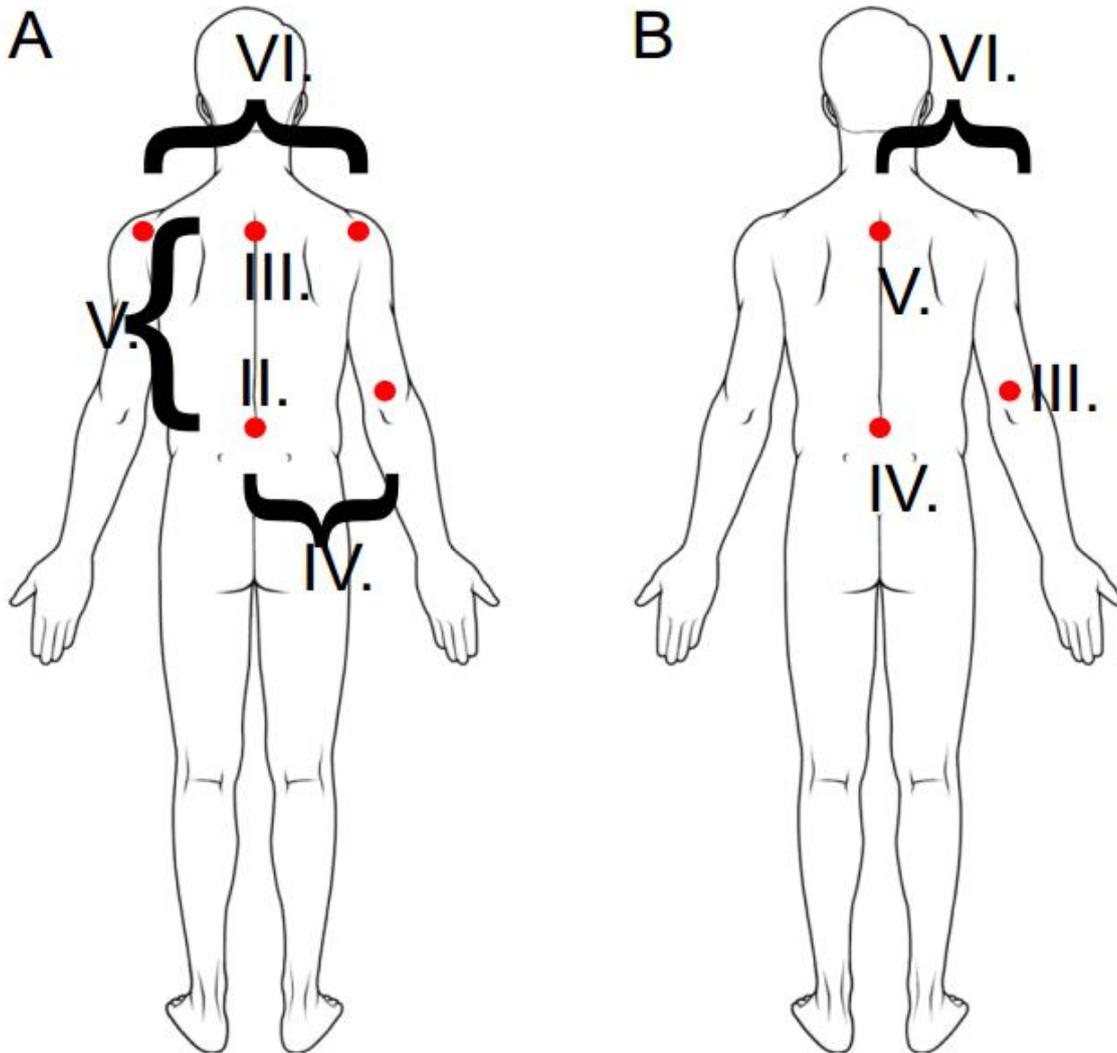


Fig.1：接触介助のポイント (A) パーキンソン患者 (B) 慢性脳卒中患者 (Johannsen L et al :

2014 より引用)

結 果

●前後方向の sway が両群で減少した

●上方の shoulder level に IPT が提供されている時や、2 contact (2点接触) が同時に提供されている時に、より効果的な結果を認めた

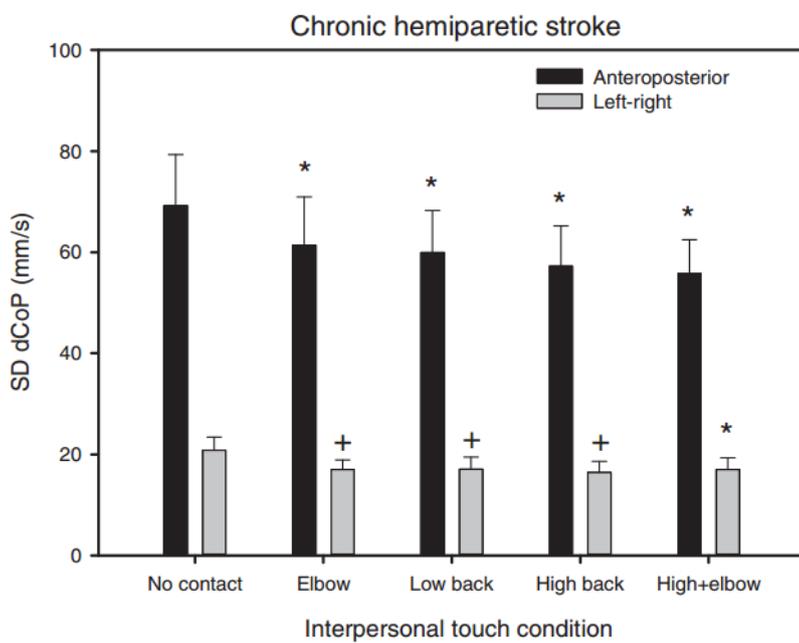
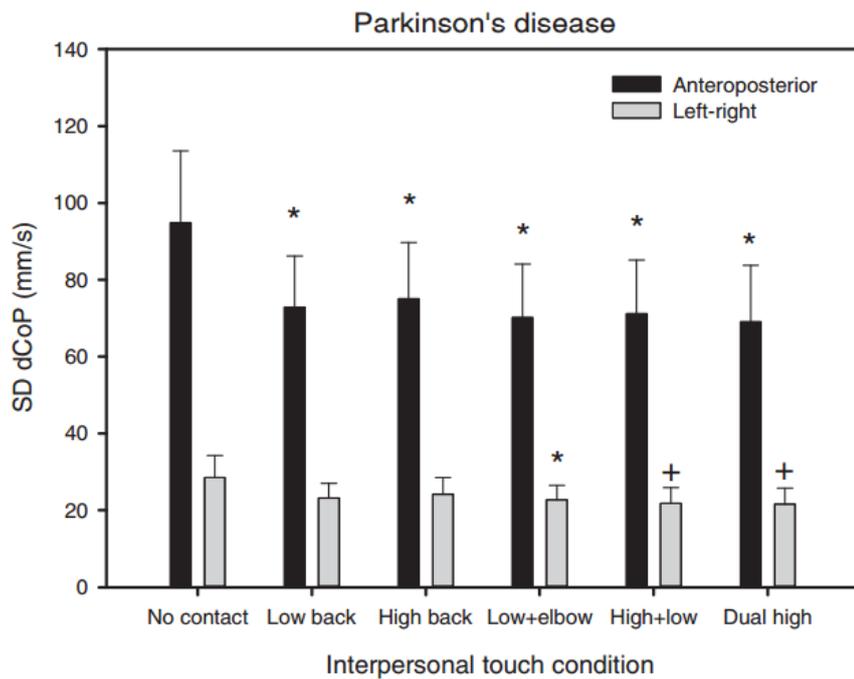


Fig.2：接触ポイント領域における身体動揺の程度比較 上：パーキンソン病患者 下：慢性脳卒中患者 (Johannsen L et al：2014 より引用)

結 論

- 軽い IPT は、患者の postural stability（姿勢安定性）を高める
- 軽い IPT は、患者の感覚運動コントロールを促通したり、バランスを保証する manual handling 戦略と同じ働きをもつと思われる

明日への臨床アイデア

- 軽い接触介助が日頃の病棟で実践されていけば、患者さんが安全にバランスを運動学習していく事ができると思われる
- 普段何気なく、軽介助・重介助などと看護サイドと連携をとっているが、その指標は一定ではなく、療法士ごとでかなりな差異があることも多い
- 重介助になりすぎてしまえば、患者さんの潜在性を引き出すことは出来ないし、軽介助になり過ぎても転倒などのアクシデント要因になり兼ねない
- 療法士が、どの程度の介助で患者さんにどのような反応があるからこの程度の介助量で実施してもらうかを、軽・中・重などの順序尺度だけで看護サイドと連携を図ってはいられないし、そのレベルの判断は看護サイドでリハ介入時より前に対策が練られていると思われるため、専門的知識・スキルをもって連携を図ることが患者・コメディカル間の信頼性を得ることに繋がるように思う

所属 回復期病院

職種 理学療法士
